

白い結婚を求め、離縁を求められる妻ですが、
既に家にはおりません。 1



ベルトマス

ヴェント子爵を継いだ、
エレクトラの兄。

エレン

偽名を名乗って教会に
潜入したエレクトラ本
人。治療士、シスター。

リシャール

騎士。ファーマソン公爵家の騎士
団に所属していた実力者だが、そ
の卓越した腕前を妬んだ騎士団
長に怪我を負わされた。

エレクトラ

元はヴェント子爵家の令嬢だっ
たが、政略結婚によってカールソ
ン男爵夫人となる。夫ハリードと
の離縁後はエレンという偽名を
名乗り、教会に潜入する。

登場人物
紹介



ジャック

ファーマソン公爵。
リヴィアの父。

???

ハリードとリヴィアの
結婚式に参列した
貴婦人。

偽エレクトラ

侍従長が連れてきた
役者。真意不明
の謎多き人物。

ハリード

エレクトラの元夫。戦場で
命の危機を救ってくれたリ
ヴィアに惚れてしまい、エレ
クトラに離縁を求めた。

リヴィア

ハリードと恋仲になった
教会の治療士、僧兵。



目次



プロローグ ～白い結婚を求める妻～

006

一章 エレクトラの見た夢

014

二章 妻は、家に居なかった

027

三章 エレクトラは家を出る

041

四章 教会のエレン

060

五章 リシャル・クラウドウス

080

断章 偽者のエレクトラ

102

断章 ヴェント子爵とのお茶会

123

六章 エレクトラとリシャル

138

七章 結ばれた二人

173

八章 女神、始めました

212

エピローグ ～彼女たちの『これから』～

265

番外編 『帰る家』

280

「申し訳ございません、ハリード様。——私、白・い・結・婚・を・求・め・ま・す」

結婚初夜。カールソン男爵家の屋敷、その屋敷にある夫婦の寝室で。

新妻となったエレクトラは夫となった男、ハリード・カールソン男爵にそう告げた。

初夜に妻が求めるには衝撃的な言葉だ。

だが、そうしたエレクトラの表情には悲愴感や憎しみといった感情は見られない。

ごく自然な、日常会話のような態度で彼女は白い結婚を求めたのだ。

対するハリードはすぐに言葉の意味を呑み込めず、呆然とした表情を浮かべるしかなかった。

「……白い結婚だと？ なぜだ。一体、何を言っている？ エレクトラ。お前、正気なのか？」

「はい、ハリード様。ですが、白い結婚というのは『一時的なもの』です」

「一時的、だと？」

「ええ。私が一時的な白い結婚を求めた理由は二つあります。聞いていただけますか？」

「……ああ、話せ」

「ハリード様は明日、出兵されますよね」

「……そうだな」

「理由の一つ目は、ハリード様が無事に、ご帰還出来るようにと願う『願掛け』です」

「……願掛け？」

「ええ、実は『騎士の妻』の間では、そういった願掛けがあるのです。命懸けの職務ですからね。妻としては戦場に出る旦那の安否こそが最も気になるところですので願掛けをしたいと」

ハリードは新妻の不穏な提案で高まった緊張感から、一気に拍子抜けした気持ちになった。

確かに明日、騎士である自分は新妻であるエレクトラを家に置いて、戦場に向かう。

戦場というのは他国との戦争ではなく、湧き出した魔獣の群れとの戦いだっただけ。

「戦場に出る前の騎士とはあえて交わらず、帰ってきてから交わる。そうすることで騎士の『生存欲求』が上がり、無事に生還出来るのだ、とのことですよ」

「……迷信じゃないのか？ 理屈は分からなくもないが……」

「それは、そうかもしれません。ですが試せることは試しておきたいのです。ハリード様が無事に戻られますように、と。ですから、どうか残される者に希望をお与えくださいませ」

「……なるほど」

男としては切って捨てたくなるような要求だ。だが、この要求の根本は、戦場に出る己の無事の生還を願うもの。そのような願いを己の欲望だけで無下にするのは、あまりに体面が悪い。

どこの誰か知らないが余計な迷信を広めてくれたものだとハリードは舌打ちしたくなる。

目の前にいる妻エレクトラは、そんな迷信を信じる女だったのかとハリードは思った。

彼女が、そんな風に考えるのだということも彼は知らなかったのだ。

結婚する前、エレクトラはヴェント子爵家の娘だった。

ヴェント子爵家特有の、水色のウェーブ掛かった長い髪と、水色の瞳を持つ女性だ。

ヴェント子爵領は、カールソン男爵領とは隣の領地になる。隣り合う領地に生まれ、年齢の近い

エレクトラたちは、自然の成り行きで婚約することになった。当然、政略による婚約である。

ヴェント子爵家には他にエレクトラの兄が居て、彼女の兄が子爵位を継ぐ。

二つの領地は、王都からは馬車で四日程度の距離にあり、どちらも広くはない領地だ。

隣り合う領地の橋渡し役としての婚約だが、大きな事業提携などはなく、領地の安定を求めている政略だった。領地が近いため、エレクトラとハリードも互いの顔を見掛けたことはあるがそこまで親密な付き合いはなかった。あっても家同士の交流程度だ。

結婚を間近に控えた際の話し合いが最も二人の交流が深かった時になるだろう。

それでも^{いさか}諍い合うような関係ではなく二人は問題なく結婚するはずだった。

だが、あろうことか結婚式を間近に控えた頃。辺境で魔獣が大量に湧いたと一報が入った。

騎士として参じると王家から命令が下され、ハリードを含む多くの騎士たちが魔獣の湧いた辺境へと動員されることになった。

ハリードが出兵する準備に使える時間の猶予はあまり与えられなかった。

そこで二人はその準備時間を捻出するため、結婚式を取り止めた。結婚式を挙げるために使うはずだった時間を出兵の準備に使うことにしたのだ。そうした事情で教会での誓いのキスもなく神父に立ち会われての書類を確認するばかりの入籍をした。二人は結婚式を挙げないまま書類上の夫婦となり、結婚初夜を迎えることになった。エレクトラが言ったようにハリードは結婚翌日の明日、戦場へ赴く予定である。そこでエレクトラが要求したのが白い結婚だ。ロクな結婚式も挙げられなかったことに女性であるエレクトラが不満を持ったとしてもおかしくはない状況だった。

だが、もしそれが白い結婚の理由ならば『面倒くさい』という苛^{いらだ}立ちもハリードは感じていた。

「……理由は二つあると言ったな。もう一つの理由はなんだ？」

「はい、ハリード様。それは『不貞を疑われないため』です」

「……不貞、だと？」

ハリードの表情は一気に険しくなる。

「どういふことだ」

「ハリード様は今、まだ気持ちに余裕がおありかと思えます。ですが戰場から帰った後では、そうはいきませんかでしょう？」

「……まあ、それはな」

「はい、そこです。例えばですが今日、私たちが初夜をこなしますと、それが一度とて、やはり子を孕む可能性は大いにあります」

「その何がいけない？ 俺たちはそのために結婚したのだぞ」

「もちろん悪くはありません。というよりも私とて、このような状況でもなければ、こんな提案は致しませんでした。結婚したのですから今夜に貴方あなたと交わる覚悟は以前より持つておりましたも。でなければ今日ここに私はおりません」

「……それもそうか」

こんな状況。つまりハリードが明日、戰場へ向かい家を不在にするような状況でなければ。

「で、不貞とは？」

「それはハリード様のお気持ちの問題でございます」

「俺の気持ちだと？」

「はい。ハリード様はおそらくですが戦場帰りですぐ荒んだ心を抱えて戻られることでしょう。どれほどの期間に及ぶかは分かりません。すぐに帰ってこられるのなら文句もありません。ですが戦いが長引いた時が恐ろしく思います」

エレクトラはまっすぐにハリードを見つめている。そこには何かを疑わせるような素振りなどまるでなかった。

「初夜の一度で子を孕んだ場合、そして魔獣との戦いが長引いた場合。ハリード様は私の膨らむ腹も、生まれてから大きく育っていく赤子の姿も目にする事が叶わなくなります。男親は自らの身体からだでないからこそ、そうした妻の目に見える変化をこそ目にする事で己が父親なのだと自覚すると聞きました。初夜で子供を授かった場合、今の私たちの状況では戦場から戻られたハリード様にあらぬ疑念を生んでしまうと危惧しています」

「あらぬ疑念とは？」

「それは私が不貞をしたのではないかという疑念です。なにせ長く離れた妻ですから。いくら監視をつけようと、それはハリード様ご自身の目ではありません。荒んだ心で一度お疑いになれば、その疑念は解決のしようがなくなるでしょう。生まれた子供が貴方に似ていれば良いのですが私に似ていた場合、ハリード様のお心を解決する術すべが私にはありません」

ハリードはエレクトラの言葉を受けて想像する。

魔獣との戦いが一年以上に長引けばエレクトラが今言った状況になり得るだろう。己の子供が己の知らぬ間に生まれている状況だ。妻の腹が膨らむところすら見られない。そして生まれてから、小さな身体が大きくなっていく姿もだ。そんな状況で一度でも妻の不貞を疑ってしまえば……。

「きつとそういった状況でハリード様がお疑いになられても、私は信じていただくより他にありません。確かに貴方の子であつて不貞など犯していなかったとしても、です」

「……そうかもしれないが、しかし」

「はい、考え過ぎかもしれませんが。ですが、この不安を解消する方法があります。それはハリード様が無事にご帰還された後。そこで『初めて』私を抱いてくだされば良いのです。そうしていただければ、まず私への不貞の疑いはなくなるでしょう。貴方の居ない間になどと不可能となります。なせ、そのような不埒なことを私がしたら絶対に貴方にはバレてしまいますから」

「……なる、ほど？」

「ええ、ですから初夜はハリード様が無事にご帰還されてから。今夜の私たちが交わらなかつたことは使用人たちにも周知しておきましょう。そうすれば、どんな言い訳をすることも出来ません。間男など発生しようがないのです。私は絶対にハリード様以外には抱かれていない、と。その証明になります。もちろん今の私は清い身体ですから」

ハリードは己の欲望と将来の懸念材料を天秤にかけて……彼女の要求を呑むことにした。
初夜で交わらないまま、ハリードは戦場へと向かうことにしたのだ。

翌朝になり、身支度を整え終えたハリードをエレクトラと使用人たちが見送りに出る。

「いつてらっしゃいませ、ハリード様。どうか無事に戻られますよう、私たちは願っております」

「ああ、エレクトラ。行つてくる」

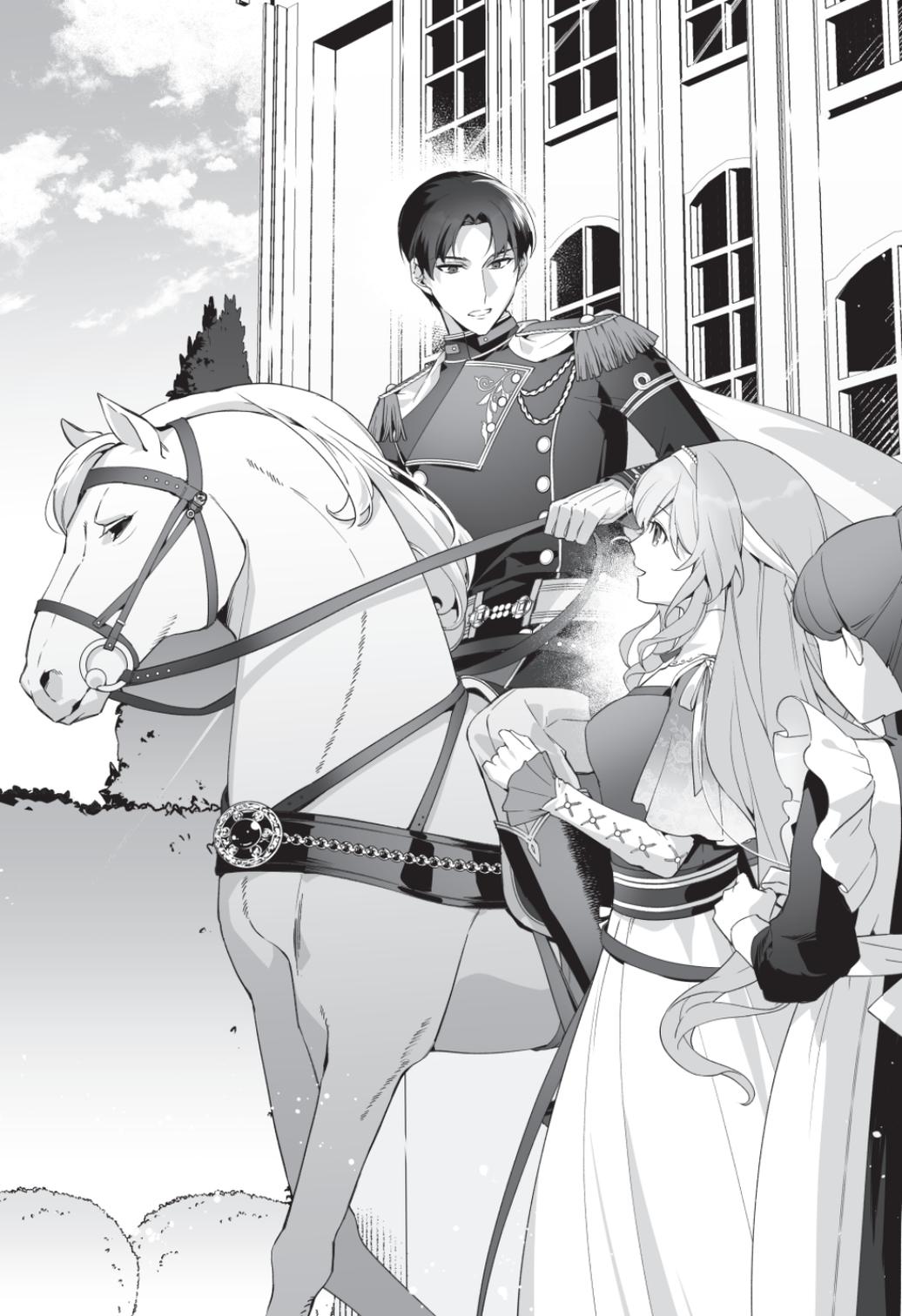
背を向けて馬に乗つて出立する騎士である夫の姿。

その背中を見送りながらエレクトラはハリードの無事を祈る。彼に死んで欲しくなどない。

その気持ちだけは純粹な気持ちなのだ、そう自身に言い聞かせながら。

「——どうか、ご無事で。ハリード様」

抱え込んだ『本当の不安』を口には出さずエレクトラは、ただそう願うのだった。



ハリードと結婚してカールソン男爵夫人となったエレクトラ。結婚した翌日に夫は戦場へ向かってしまった。そのことについて彼は何も悪くない。王命による騎士の召集と派遣だ。従わない選択肢などがない男爵にあるワケがないのだから。結婚式が流れてしまい、誓いのキスすらなかった、なんとも寂しい結婚であったがそれだって仕方のないことだった。なにせエレクトラたちの暮らすランス王国は国難に見舞われていたのだから。

西側の辺境伯グランドラ家の領地が面しているのは国境ではなく森だ。そこで湧き始めたらしい大量の魔獣の被害は深刻なものだという。援軍の派遣は一刻を争うものだった。そのため辺境への派遣の王命は騎士爵を持つほとんどの者に下された。

国全体に被害が及びかねない緊急事態であるが故に動ける者から速やかに辺境へ向かうように命は下った。武器や馬など必要なものは各々で準備して可能な限り迅速な出兵が望まれたのだ。

悠長な準備期間などなかったのも当然だろう。そうしている間に国が滅びては、と。ハリードは領主の立場にあったが同時に騎士爵も有している。彼の父から男爵を継ぐまでは騎士としての活動もしていた。そのため、領主ではあるが今回の王命を受ける立場となったのだ。

エレクトラと結婚が間近だったことも領主である彼が出兵を余儀なくされた理由なのだろう。

不定期間、領主不在となる男爵領はヴェント子爵令嬢であった彼女が担えるはずだ、と。もしもの際には隣領に彼女の実家となるヴェント子爵家もあり支援は受けられるはずだとも。また言っ

しまえばカールソン男爵領は他領と比べて小さな領地だ。そうであるが故に、小さな領地を守ることよりも一人でも多くの騎士を迅速に動員することが優先された。

ハリードたち以外にもそうして負担を背負うことになった者や関係者は多くいるはずだ。

そうした状況のため、ハリードの出兵を遅らせてまで結婚式を挙げることは出来なかった。

無理にでも結婚式を優先していれば他の貴族家に注目され、非難されることは出来なかつただろう。

本当ならば昨日、二人は結ばれる……肌を重ねる予定だった。初夜だったのだから。それがどうして白い結婚なんて求めたのか。直前になって初夜を拒否して、よく夫を納得させられたものだとエレクトラは苦笑いする。エレクトラとて今回の結婚に至る流れに思うところは多々あつても覚悟はしていた。だから、その行為に多少の恐れはあつても事を為す^な気でいたのだ。だが……。

「……あの夢は何だったのかしら」

エレクトラは結婚する前に何度か嫌な『夢』を見るようになった。

ハリードに辺境への出兵の王命が下つてからだ。彼女が夢を見始めたのは結婚式を挙げるはずだった予定日の二週間ほど前からのことになる。夢の内容は、戦場から帰還したハリードが隣に別の女性を連れてくる姿だった。そして彼から離縁を申し出られる光景だ。

……ありえない不安が、ただ夢に出ただけ。マリッジブルーというものだったのかもしれない。ただ妙にリアルでまた鮮明な夢だった。ハリードの横に居た女性はエレクトラが一度も見たことがない人物だったのも何か予感めいたものを感じてしまう。

なぜ見たこともない女性の姿をはっきりと夢に見たのか。アレは予知夢だったのか。或いはまた別の……？ エレクトラはその夢をただの夢に過ぎないと切つて捨てることが出来なかつた。

何度か同じ夢を見たためだ。夢の中でハリードが話す言葉には僅かに異なる点があるものの変わらないのは彼の隣に女性が立っていること。そして自身が離縁を突きつけられることだ。

だからといって夢の内容そのままをハリードや周囲に伝えてもどうなるものでもない。きっとエレクトラが心配されるか呆れられるかというところだろう。エレクトラが感じている焦燥感や疑念を共有出来るとは思えなかった。苦肉の策としてエレクトラは白い結婚を提案してハリードと身体の関係を持つことを避けたのだった。

「……可愛い女性だったわね」

夢の中の記憶だ。どうも申し訳なさそうにエレクトラを見ていたのだが……。ハリードに対しては愛おしい視線を向けていた。状況から考えるに戦場に出たハリードが彼女と出会い、そこで意気投合して愛し合った。そして帰ってきたハリードが彼女と結ばれるためにエレクトラに離縁を突きつけた、と。

「……そういう状況に見えたのだけど」

しかし、夫が向かったのは魔獣が蔓延る戦場である。そこで彼女と出会うのだろうか？ 確かに戦場には治療系の魔法を使う者たちも派遣される。主に教会預かりの僧兵たち。治療魔法が使える治療士たちだ。騎士よりもずっと女性の数は多いだろう。彼女は、その中の一人なのだろうか？

「あれは夢よ。……分かってる。でも、あれがただの夢ではなかったら？」

夫であるハリードは少なくとも無事に家に帰っては来るらしい。

記憶の限り彼は五体満足だった。それは良い『予知』であるのだが。

「どれぐらい先のことなのかな？」

夢の中の彼が戰場帰りなのは間違いない。見る限りハリードも年は重ねていなかった。であれば数年以内のことか。夢の中の自分に子供が居たかは分からない。だが、もし未来で自身が離縁を突きつけられるならば清い身体であった方が良いはずだ。エレクトラは頭から離れない夢の内容に大いに悩まされる日々を送った。それでも、とにかく男爵夫人として瑕疵のない振る舞いを心掛ける。夫の不貞で離縁されるなら被害者だが、自らの至らなさを責められての離縁だったら目も当てられない。家に夫が居ない妻として余計な疑いを持たれぬように常に侍女を伴うことにした。

今この屋敷を切り盛りするのはエレクトラの役目だ。あまり考えたくはないものの離縁される可能性も念頭に入れつつ、きちんと男爵夫人としての仕事をこなしていこうとエレクトラは決めた。あとは戰場から来る報せを待ちながらハリードの無事を祈りつつ、今後のことを考えていく。エレクトラは、さっそく屋敷での仕事を始めるのだった。



領地を出たハリードはグランドラ辺境伯領に辿り着き、辺境の騎士団に合流する。

魔獣の大量発生は深刻な事態だった。初動は辺境伯家の騎士団が抑えたものの、現れた魔獣の数が多過ぎたのだ。なんとか持ち堪えつつ民を守りながら後退し、近隣の家門からも援助を受けて、窮地を凌いで。報せを聞いた中央からの援軍を待つて魔獣の群れを大きく押し返す作戦。

これが上手くいけば状況は良くなるが、失敗すれば悲惨なことになるだろう。ハリードを含めた援軍の騎士たちはこの押し返し作戦に参加することになった。グランドラ領の森に近い街は大量の

魔獣たちによる侵攻を何度か受けた様子だ。建物や壁など建造物が倒壊し、木々が倒れている。既に鎮火しているが火事もあったようだ。街の住人たちは森から離れるように避難し、おそらく人の居ない廃墟となりかけたのだろう。魔獣の溢れた森に近い街は一度捨て、代わりにそれより中央側に防衛ラインを引いた様子だ。援軍を受け入れることで防衛ラインを押し進め、ハリードが到着した頃にはどうにか街を取り戻したようだ。

ハリードは取り戻したばかりの街に来て、その状況を目の当たりにした。

そして合流した他の騎士たちと共に早々に魔獣と対峙することになる。

「大きな狼、そして蛇か……」

陣形を整えた上でならばまだ狼の相手は出来るだろう。しかし蛇は厄介だ。こちらの陣形をするりと抜けてしまう。またどちらも森の中に入り込まれると一気に討伐が難しくなった。

初戦を生き残り、他の騎士たちと交代して休憩を取りながら戦う。連日連夜、魔獣との戦いは続いた。まずは防衛線の死守で手一杯だった。しかし多くの援軍を得たことで休憩を取ることが出来た。辺境伯家の騎士団も気力を取り戻した。加えて教会からの僧兵団も到着し、多くの負傷者が救われることになる。

そして戦いを続け、騎士たちは民の生活圏から魔獣を追い出し、森へと押し返すことに成功した。ここから更に防壁の建造も視野に入れ、物量で対処していくことになる。

「森へ深入りしての追い討ちではなく、防壁の建造か……」

「そうらしいぜ。木を切り倒しながら進軍するって案もあるらしいけどな」

魔獣の殲滅が出来ればいいのだがそれは現実的ではないらしい。また森に入り込むとこちら側の

戦況が不利になってしまふ。戦力が減ればまた同じことの繰り返しだ。そのため防壁を新たに建造し、こちらに有利な戦場を築き上げるのだという。

「……時間が掛かる戦略を取ったものだな」

それらを辺境伯家の騎士団のみでやれるならばいい。だが、実際は他の地から多くの人材を派遣した上でのことだ。もちろん同じ国に住む以上は重大な問題であるのだが。

「ハリードは結婚したばかりなんだったか」

「ああ、結婚した翌日に来た」

「それは色々ひどと酷いな。早く妻の下に帰りたいだろう」

「そうだな……」

ハリードとエレクトラは白い結婚だった。こうして戦場に出て、今のところ大きな怪我けがは負っていないが……。やはり初夜ぐらいは済ませてからが良かったのではないか、と思った。

生存本能というなら、むしろ一度ぐらい妻を抱いた方が高まる気がする。

子供だってああ言われたが、そうそう妻の不貞を疑うことなどないはずだ。

「やはりあの話は迷信だな。まったく……」

誰が広めたのだから。本当に迷惑だし、『損をさせられた』とハリードは思う。

「妻に手紙でも出さないのか、ハリード」

「……手紙か」

防壁建造の案が現実味を帯びた頃。騎士たちにも多少の余裕が出てきていた。そうは言っても領地に帰れるほどの状況ではないのだが。ハリードは領地で待つ妻エレクトラのことを思い出す。

愛が芽生えるほどの交流はまだしていないものの、美しく利発的な妻だ。出兵がなければ彼女と身体の関係を持ち、親愛の情だって湧いていたはずだろう。

実家のヴェント子爵を継いだ彼女の兄も隣領にいるからカールソン領は問題ないはず。ここでの戦況はそれぞれの騎士の關係者を中心に中央や各領地へ報せているらしい。グランドラ領の戦いは多くのランス王国貴族が注目しているのだ。だからエレクトラの下にもハリードが無事であることは伝わっているだろう。

「……面倒だ。無事が伝わっているのなら文句はないだろう」

ハリードはそう思い、エレクトラへの個人的な手紙は書かなかった。

彼と話していた騎士は呆れた様子で肩を竦めるのみだ。

それから戦場は一進一退の攻防となった。魔獣たちには昼夜も関係ないらしく、むしろ夜の方が活発だった。今までよくも辺境伯家の騎士団だけで抑え切れていたものだと感心する。それでも戦場に来て一ヶ月もすれば、だんだんとこの事態にハリードは慣れていった。慣れてしまえば狼も蛇もただ普通より大きいだけでそこまで強くもないのだ。それにハリードは他の騎士よりも強い方だった。なおのこと余裕をもって過ごすことが出来ていた。

「こんなヤツなら森に攻め入って滅ぼした方が早いだろうに」

ハリードはそう思う。……だが、そんな考えが彼の油断に繋がった。

「なっ……!?!」

ハリードの前に新たな魔獣が現れたのだ。今までの四足の獣である狼ではなく。

二足歩行で立ち上がり、鋭い爪を有した狼……ウエアウルフだった。

『キシャアア!!』

「ぐっ!」

今まで戦ってきた魔獣とは異なる存在。それも見るからに凶悪そう。対峙するには明らかに今までより脅威度が跳ね上がっていると分かる魔獣だ。新たに現れた脅威に対し動揺を隠せない騎士たち。襲い掛かれ、多くの騎士がやられていく。ハリードも怪我を負ってしまった。

「くそおとおおっ!!」

だが、追い詰められたハリードは底力を発揮し、ウエアウルフを仕留める。そんな彼の姿に気力を取り戻した騎士たちは声を張り上げて、なんとかウエアウルフの攻勢を押し返すことに成功したのだった。

「ぐっ……うう……!!」

「ハリード、大丈夫か! くっ、彼も運んでくれ!」

ハリードは仲間の騎士に運ばれ、負傷者が収容される後衛のテントに連れてこられた。

ここでは治療魔法を使える僧兵たちが負傷者の世話をしている。

「うう……ぐ、うう」

ハリードは多くの負傷者と一緒にされ、治療を待つことになった。彼の意識としては気が遠くなるような時間を待たされ、ようやく彼の治療が始まる。

「今、癒やしてあげますからね」

「うう……早く」

朦朧もうろうとし始めた意識で自身に掛けられる声に縋すがった。それは女の声だった。

「う……あ……」

女がハリードに手を翳かきすと温かな光が溢れ、彼の苦痛を和らげていく。心から救われた気持ちになった。死ぬかもしれない痛みと恐怖から、その女が己を救ってくれたのだ。

「はあ……、ああ……だいぶ、楽になった。……ありがとう」

「どういたしました、騎士様」

意識と視界が、はっきりし始めたハリードは改めて己を救ってくれた女性の姿を見た。

「——！」

ニコリと微笑ほほえむその姿は、とても美しく可愛らしく……。

「……女神だ」

「え？」

神々しく見えた。ハリードは己が彼女に出会うために生まれてきたのだと、そう感じる。

「君の、名前は……？ 教えて欲しい」

「リヴィアと言います、騎士様」

……それが彼らの出会いだった。



ハリードが出兵してからもう一年が過ぎてしまった。魔獣との戦いは長引いているようだ。

エレクトラの下にも逐一その報せが届く。辺境では防壁を築き上げることで魔獣への対応をし、それがようやく完成に近付いているようだ。近い内に派遣されていた騎士たちは帰還することになるだろう。幸いハリードの計報は届いておらず無事に帰ってくる見込みだ。

「良かったですね、奥様」

「ええ、そうですね。それにしてももう一年。長かったのやら短かったのやら」

エレクトラはハリードが居ない間きちんと男爵家を切り盛りしていた。大きな領地ではないために、間に人を挟まずほとんどが直接の指示になり、今やカールソン男爵家の女主人といえた。

「……何も憂いがないければハリード様が帰られるまでの話と割り切れたのだけど」

どうしてもエレクトラはあの夢を忘れることが出来なかった。今も戦地で、命懸けで頑張っているハリードのことを思えば疑うことに罪悪感すら覚える。だからこそ今日まで男爵家をきちんと取り仕切ってきたのだ。それでも。もし、エレクトラが見たあの夢が現実になったら。そう考えて、あくまで『念のため』ではあるが。エレクトラは密かに使用人たちや領民が困らぬようにと日々の仕事についてのメモを残しておいた。また使用人たち全員に仕事の紹介状も用意している。

『エレクトラがこの屋敷や領地から突然居なくなっても』困らないように、だ。もし、夢の通りになつてしまえばエレクトラはある日突然にこの地から去ることを余儀なくされる。そうなつた場合に使用人たちや領民が困らないように。

帰ってきた領主と領主の新しい……妻。そんな彼らが現れて家を取り仕切つて。そうなつたら、きっと彼らは混乱してしまうだろうから、と。エレクトラは考えていた。夢の内容を信じ切つていたワケではないが大いに影響を受けている。使用人や領民の生活が守られるなら。たとえ夢の内容

通りの運命が待ち受けていたとしても。残るのはただハリードがエレクトラを裏切る、それだけとなる。……そう、それだけ。

ハリードは今、命懸けで戦っているのに？ それなのに自分は彼を疑っている。何の証拠もなくただ怪しい夢を見たというだけで、だ。なんとも酷い話だと思う。ただ夫が無事に帰ってきてくれるといい。それだけは揺るぎなかった。少なくともエレクトラはハリードが死ぬことなど望んではない。だが、一年以上も待った夫が別の女性を連れてきたら？ そして自分に離縁を申し出たら？ そう考えると不安で仕方ないのだ。戦地に夫を送り出した妻としてはまったく筋違いの悩みだった。

一応、全体的な戦況については連絡があるのだが王都に比べれば田舎いなかのカールソン男爵領にそれらが届くのは少し遅くなる。数ヶ月おきに凶悪な新種の魔獣が現れるとも聞いた。どこまでそれが本当のことなのかさえ分からなかったが……。ハリードは何を思っただけで戦っているのだろうか。家で待つ妻のことを想おもってくれているだろうか。死にたくないと言いつつ弱音を吐き、泣いてしまったとして誰がそれを責められるのだろうか？ 所詮、戦えない自分はどうして彼を待つことしか出来ず。

もし、ハリードが戦場で誰かと出会ったなら。その誰かに心を動かされてもおかしくないのではないだろうか。だって自分たち夫婦の間に愛などまだ生まれていない。たった一日の結婚生活。それも交わりすら拒んだのだからよりいっそうに繋がりは希薄で。今の自分は被害者ではない。むしろ夫を疑い、純潔すら捧げたたくなかつた妻だった。

……潮時なのかもしれない。日が経たつにつれ、夫への罪悪感が膨らんでいくのだ。彼は死ぬかも

しれないのに彼を送り出す前、自分のことばかり考えてしまった。もしも戦場で彼が亡くなったら？　せめて彼の血を引く子供を孕んでいればそれが希望や救いになっただろうに。その可能性すらエレクトラは摘み取ってしまった。仮にあの夢が真実であったとしても。先に伴侶を裏切ったのははたしてどちらだろうか？　不貞さえ犯さなければ裏切りとは言えないのか？

……このままではいけないと思った。だって、この先どうなるにしても自分はずっと苦しいままなのだ。夫が無傷で帰ってきて微笑みかけてエレクトラを愛するために帰ってきたのだと。

そう言われたら、どうしたらいい？　本来ならばそれは最も望ましいことだったはずなのに。

きつとそうなたら罪悪感で自分が許せなくなるだろう。一体、己は彼の何を疑っていたのだと。このままでいいはずがない。だからエレクトラは決意した。そうしてエレクトラは準備を始める。来たる日のために。だが、そんなエレクトラの苦悩の日々に思い掛けない終止符が打たれることになる。それは戦場からもたらされた一報が理由だった。

「ハリード様が戦場で女性の僧兵を見初めて口説いている。二人は恋仲だと有名？　ハリード様は大活躍して……『英雄』とまで呼ばれて……」

まず始めにエレクトラが思ったことは『何をやっているのだ』だった。

まあ、とりあえず。ハリードは戦場でも無事らしい。それは良かった。それどころか大活躍しているらしい。英雄とまで言われるほどに。どうもかなり大きな魔獣の個体を打ち倒したことがきっかけのようだ。その功績で陞^{しょうしやく}爵もあり得るのだとか。ここまでだけなら良いこと尽くしの報せと言えるだろう。だが、その英雄には戦場で恋人がいるとまで書かれているのは何なのか。

その男には妻がいるというのに。どうも世間に知らされる話の中では、英雄とそれを支える女性

を讚美する方針らしい。これだけでは当人の考えを無視したプロパガンダか何かとも言える。

間違つても今はハリードを責められる段階にはないだろう。

彼が本当にその女性を連れてきて彼女を愛しているとしても言わない限り。

「……あはは」

エレクトラは笑うしかなかった。結局、確信を持ってない以上は今まで苦悩してきたことと変わ
ない。だがなぜか心は晴れやかな気持ちだ。——や・っ・ば・り。

そう思えて。エレクトラの心は軽くなっていた。

ハリードが戦場に出て、二年が過ぎた。魔獣対策は整い、また多くの魔獣が葬られたことでようやく辺境は落ち着き始めている。防壁が築かれ、格段に人的な消耗が抑えられた。そして戦力にも余裕が生まれたことで次の作戦が組まれた。森の浅い部分のみだが木々を切り倒すことで徐々に森の奥深くへと続く道を作る。そう。以前は断念していた森への侵攻だ。とうとうこちら側から攻め入ることが出来るようになったのだ。これによってよりいっそう街の防衛が楽になる。

そして他領から派遣されていた騎士たちは帰還の目処めども立てられるようになった。

ハリードもそうだ。彼はようやく家に帰ることが許された。

「ハリード、君には残って欲しいのだが」

「辺境伯閣下……」

ハリードは頭角を現し、多くの功績を上げた。『英雄』とまで持ち上げられ、多くの騎士たちの士気を上げたのだ。

「お言葉ありがとうございますですが私にも守るべき領地があります。この地が落ち着いたのであれば、やはり自分の領地に戻りたいと思います」

「そうだな、その通りだ。今まで本当に助かった。君がこの地に来てくれたこと感謝している」

グランドラ辺境伯は侯爵と同等の身分だ。王家の血を引いている特殊な立場である公爵家を除けば貴族の頂点に並ぶ。男爵に過ぎないハリードがそんな辺境伯にここまで目を掛けられることは、

とても名譽なことだった。

「……ところでハリード」

「はい、閣下」

「君には奥方がいると聞いたのだが……」

辺境伯はチラリと彼のそばにいる女性に目を向けた。

教会から派遣されてきた女僧兵、リヴィアだ。二人が恋仲であるという話は、ハリードが英雄とまで持ち上げられたことで広まってしまっている。だが、正確にハリードの状況を把握している辺境伯はずっと気がかりだったのだ。今までは騎士たちの士気を下げないために聞くに聞けなかった。だが、もうこの地を離れるのならハリードの考えを確かめておきたいと辺境伯は問いかけた。

「……私はリヴィアのことを……愛してしまいました」

「ハリード様……!」

その言葉に歓喜の表情を浮かべるリヴィア。それを見て情熱的な視線を向けるハリード。確かに『気持ち』の部分では二人は結ばれているのだろう。だが、そういう問題ではないと辺境伯は思う。

「では、奥方はどうするつもりだ」

「……それは。実は閣下。私とエレクトラは白い結婚なのです」

「白い結婚?」

「はい、初夜ではエレクトラと肌を重ねませんでした」

「……そうなのか? それは何か問題があったのか?」

「いえ、エレクトラからの提案で。願掛けだと言っていました」

「願掛け？」

「ええ、出兵前の騎士の妻はあえて交わらないことで夫の帰ろうとする気持ちを強くするのだとか。それで生き残れるように、と」

「……私も剣を振るう身だが聞いたことがないな、その願掛けは」

「そうなのですか？」

「まあ、夫人方に流行はやっているものを男である私が把握していかないだけかもしれない」

「……はあ。とにかくそうした願掛けのために私はエレクトラを抱きませんでした。ですから離縁となってもエレクトラの『傷』にはならないかと」

そんなはずがないだろう、と思ったが辺境伯は口を閉じる。そして話の続きを促した。

「もちろん、エレクトラは簡単には納得してくれないでしょう。泣かれてしまうかもしれませんがそこは私が彼女を説得するつもりです。それに白い結婚による離縁が成立するのは結婚してから、三年。だから、あと一年、我慢すれば正式にエレクトラとは離縁することが出来ます。そうしたら私はリヴィアと結ばれることが出来ますから」

辺境伯は胡乱うらんな目になる。呆れと仄ほかな失望だ。『何を言っているのだ、この男は』と思った。

「……そうか。まだ君も若かったのだな、カールソン男爵」

「え？ は、はい」

「では、領地に戻っても達者でな。君がどんな人生を歩んだとしても私が君の尽力に感謝していることは変わらない。今までありがとう、カールソン男爵」

「は、はい！ こちらこそお世話になりました！」

グランドラ辺境伯はハリードとリヴィアを送り出した。その姿が見えなくなってから、そばに控えていた側近に話し掛ける。

「英雄は色を好むというが、アレもそうか？」

「……うーん。どう受け取られませうかね。功績と醜聞、どちらがより評価されるか。ある意味で、大衆受けがいいとも言えます」

「まあ、そうとも言えるな」

「英雄としてはより話題になります、貴族としては問題ですね」

「そうだな。だが白い結婚ならばまだマシという考えも……あるのか？」

「さあ……。奥方様が自棄じきにならなければ良いのですが」

「……我が領地が魔獣の対処を出来ていれば壊れなかった、そして結ばれなかった縁か」

「閣下、それは……」

「分かっている。誰にもこんな事態を予期など出来なかったさ。ただなあ」

援助をしようにも今の辺境伯家には余裕がない。ハリードが間違った対応をしないように祈るのみだが……。今の時点で既に間違っていると云っている。

あの状態から『誠実な対応』など、はたして可能なのか。そういった方面に疎い辺境伯には分からなかった。彼は愛妻家だったからだ。

「しかしハリードがこの地の恩人であることに変わりない。だからこそ人道を外れた真似まねをしないで欲しい。そう願おう」

「そうですね……」

辺境伯と側近は、遠い目をして英雄が去っていった方角を見るしかないのだった。

ハリードは英雄として領地に凱旋することになる。騎士としてこれほど誇らしいこともないだろう。しかも隣には『最愛の人』も伴って、だ。加えて、実はハリードには正式に陸爵の話も来ていた。もちろん辺境での功績に対してだ。流石さすがにいきなり伯爵ということではなく子爵に上がるだけだが、それでも名誉なことだ。それに伴って領地の拡大といきたいが、そうすると近隣の領地を接収する形になってしまう。隣の領地は今の妻であるエレクトラの実家。ヴェント子爵家の領地だ。

瑕疵もないのに他家の領地を取り上げることが出来ない。だから陸爵に伴って領地を賜るならば今の男爵領とは離れた別の土地を与えられるか。そうしたら今の領地には代官を立てて……。

「……ああ、代官か」

「ハリード様？」

「いや、なんでもないよ、リヴィア」

まだ正式に子爵は賜っていない。だが、もしも子爵になるにあたって別の土地を与えられたら、自分はリヴィアと共にそちらで暮らす。そしたら、この地の『代官』には……エレクトラになってもらうのはどうだろう？ なにせ彼女は自分の居ない二年間、カールソン男爵領を切り盛りしてきたはずだ。離縁を告げることは心苦しい。きつと泣きつかれるに違いないが、自分はもうリヴィアを愛してしまった。だからエレクトラには別れてもらわなければならぬ。

だからこそ代官という役職に取り立てることで彼女の二年間に報いるのだ。

「……うん」

それでいこう。今思えば白い結婚であったことはせめての救いだったかもしれない。これも運命と言えるだろう。きっと自分とリヴィアが結ばれることこそが運命で、だからこそ、そういう巡り合わせだったのだ。二年前、エレクトラは自身が不貞を疑われなために白い結婚をと願った。

それがまさか離縁の後押しになるなんて夢にも思わなかったに違いない。

「……やっぱり泣かれてしまうかな」

「ハリード様、もしかして奥様のことを考えていらっしやるの？」

「……うん、すまない。リヴィアの前なのに。でも離縁の話はしなければいけないから」

「ううん、いいの。だって私も悪いもの。奥様には謝りたいわ」

「リヴィアが謝ることなんて！ 俺が君を愛してしまっただ……」

「ハリード様……ううん、私も。貴方を愛してしまっただから」

そうしてリヴィアとの愛を確かめ合いながらハリードはカールソン男爵領へと帰還した。

「久しぶりだな。それにしてもこうして見ると狭いな、我が領地は」

「ふふ、それでも素敵なところじゃないですか」

「そうかい？」

二年間この地からは離れていたが特に荒れている様子はなかった。むしろ出発する前より整っているように見える。遠くに見えてきた屋敷もきちんと手入れされているようだ。

二年も主が居ない領地がどうなるか不安だったが、どうやら大きな問題は起きずに済んだらしい。

屋敷に着くと使用人たちがハリードを出迎えに来る。

「おお……？」

「どうしたの、ハリード様」

「いや、使用人がこうして出迎えてくるのは初めてだ」

「え？　ハリード様は領主なのよね？」

「ああ、だが所詮は男爵だからな。それに雇っている使用人も当然、なんというか。平民上りがほとんどだ。だからこういう如何にも貴族の使用人といった態度での出迎えをする習慣はなかった」

二年、ハリードが居ない間に使用人たちは改めて貴族に仕えるということを学んだのだろうか。

それとも二年振りの主の帰還だからと、こうして今日だけは歓迎してくれたのか。なんにせよ気分がいいことだ。愛しのリヴィアにも如何にも自分が貴い身分のだと示すことが出来た。

「サイード。今、帰ったよ」

「お帰りなさいませ、旦那様」

侍従長であるサイードに自ら声を掛けるハリード。

「皆、見違えたな。こんな歓迎の仕方をいつ覚えたんだ？」

「エレクトラ様に教わりました」

「……エレクトラに？」

「はい、旦那様。彼女はれっきとした子爵令嬢でしたから。我々が知らぬ礼儀もご存知でした」

「そ、そうか」

まさか気分の良い歓迎の仕方を教えたのがエレクトラだとはハリードも思わなかった。

思えば如何に家を継げない令嬢とはいえ彼女は自分よりも爵位が上の子爵家の出だ。

今まであまりに二人の担う役割が違うせいか意識はしていなかったのだ。思いがけずエレクトラの名前が出たことで気まずい思いを味わうハリード。だが、これから、もっと大事な話を彼女としなければならぬことを思い出して決意を固めた。

「サイード、悪いが今すぐエレクトラを呼んでくれ。執務室……いや、応接室にだ」

ハリードはリヴィアの手を引いて屋敷の中へと歩みを進めながら、そう指示する。

流石に今すぐに出ていけとは言えないだろう。エレクトラは自分に泣き継るだろうし、嫉妬からリヴィアを傷付けようとする可能性もある。だから常に自分はリヴィアと共に居なければ……、

「それは出来ません、旦那様」

「……は？」

だが、侍従長から返ってきた言葉はハリードの予期しないものだった。

「なぜだ？」

「エレクトラ様は屋敷にはいらっしやいません」

「……何？ どこかへ出掛けているのか？ 主人が帰ってくるといふのに？」

まさか、エレクトラは自分が居ない間、男爵家の仕事をしていなかったのだろうか？

遊び呆けていた？ 自分が戦場で、命懸けで戦っている間に？ そう考えてムツとする。だが。

「いいえ。出掛けているのではなく屋敷には居ないので、旦那様」

「……は？ 何を言っているんだ」

「……執務室の机の上に、エレクトラ様からの手紙をご用意しております。旦那様が自ら確認していただくのが早いかと」

「手紙だと？ エレクトラは今どこにいるんだ」

「それは把握致しかねます」

「なんだって？ お前、侍従長が夫人の居場所を把握していないで許されると……」

「夫人は、いらっしやいません」

「はあ？」

「……旦那様には、どうかエレクトラ様からの手紙を読んでもいただきたく思います。すべての話はそれからだと存じます」

「……何なんだ」

ハリードは苛々とし、声を荒らげたのだが使用人たちの誰もハリードに説明しようとしな

貴族家の使用人としての振る舞いは格段に向上したが、主人に対する態度としては随分だった。

「どうか、手紙を」

「分かった。リヴィアを応接室へ案内してくれ。護衛も付けるように……いや、エレクトラは居ないのか」

「……エレクトラ様がいらっしやっても屋敷の中で護衛を付ける必要はないでしょう」

まるで責め立てるような侍従長の視線にハリードは不穏な気配を感じた。

「……本当にエレクトラは家に居ないのか？」

「はい、旦那様」

なぜなのだ、と。ハリードは思う。理由が思い当たらない。

「……俺が居ない間、いつも彼女は外で遊び呆けていたのか？」

ハリードが問い掛けると、その場の空気が一気に冷え込んだように感じた。

「少なくともエレクトラ様が遊び呆けるなどと他の用人たちの前ではおっしゃらないでください。旦那様がエレクトラ様を愚弄する意味がまったく分かりません。あの方はカールソン男爵領に対して、この二年間本当に尽力していただきました。我々用人一同、エレクトラ様に敬意を抱いています。当然、その職務も立派にこなされてきましたよ」

「……それは俺が家の仕事をしていなかったと言いたいのか？」

ハリードは侍従長サイードの強い言葉にムツとして言い返した。

「旦那様はお疲れなのです。先程からおっしゃっている言葉に意味が通っておりません。なぜ、戦地で戦われていた旦那様をそのように言わねばならないのですか」

「では、先程の物言いはなんだ？」

「男爵家に嫁ぎ、立派に職務をこなされていた男爵夫人に対して敬意を払う。そんな奥様にありえない愚弄とも取れる疑念をぶつける旦那様をお諫めする。どちらもカールソン男爵家に仕える者として当然のことです。むしろそれをしない方が用人失格かと思えますが……。本当に旦那様は何をおっしゃっているのですか？」

「もういい！」

苛立ちながらハリードは執務室に急いだ。誰も使わずに荒れているかもしれないと思ったが、それは杞憂で、執務室は綺麗に掃除され整えられていた。すぐにでもこの部屋で仕事が出来てしまえ

そうだ。まるでいつもここで『誰か』が仕事をしていたかのように。

「エレクトラの手紙、これか。……ん？」

これみよがしに机の上に置かれていた便箋を手取るハリード。

それと一緒に折り畳まれていた紙が、パサリと床に落ちた。

そして、それを思わず拾おうとしたハリードは――

「……………は？」

その紙が『何』であるかに気付いて固まった。

「なん、だ、これは……………」

その紙は王国が正式に発行している『離縁状』だった。実は今日、ハリードも同じ物を用意してきている。当然、ハリードの名が既に書かれている離縁状だった。これを突きつければ、きっとエレクトラは自分に泣き絶えださう、と思いつつながら。それでも愛しいリヴィアのためならば心を鬼にしようと決意していた。だが、ハリードが拾った離縁状は妻であるエレクトラの名が既に記されていた。二枚の離縁状はまるで二つで一つのようなようだった。

「なぜ……………」

わなわなと手を震わせるハリード。どういふことかと侍従長を怒鳴りつけようとしたが、その前にとエレクトラからの手紙を見ることにした。乱暴に便箋を開き、エレクトラの手紙を読む。

『親愛なるハリード・カールソン様。いつも貴方の無事を祈っております。』

しかし、戦場からの一報にて貴方様が愛する者を見つけたと知り、私も覚悟を決めました。

どうも、私は必要なご様子。一体、戦場で何をなされているのか、とも思いましたが……………。

貴方様の戦いもまた知らされております故、その功績までは疑いません。

また、このような一報を意図して報じる悪意も感じました。

私は、私の存在が領民に迷惑をかけ、使用人たちを苦しめることになるのは許せません。

よって速やかに離縁させていただきまます。使用人たちには、主がしばらく居なかるうとも暮らしていけるように手配しております。エレクトラ・ヴェント。』

ハリードは自覚なく、その場に膝を突いていた。

『――追伸。貴方様には心底、失望致しました。』

貴方のような人のために貞淑であろうとした私が愚かだったようです。戦場で充分に不貞を樂しまれたご様子。私も驚きました。そのような騎士もいらっしやるのですね？ 貴方だけだと思いたいですが。今では、貴方と離縁出来ることを嬉しく思うほどです。もう二度と貴方の顔は見たくありません。さようなら』

辛辣に綴られる文面に妻の怒りを感じた。確かに今日、ハリードはエレクトラに離縁を突きつけようとした。泣き縋られると思ひ込んでいたが……。蓋を開けてみればこれだ。ばつの悪さ、罪悪感、或いは甘い見通し。どこかで離縁を突きつけたあととも変わらない何かを期待していたようないや、それでも彼女が『邪魔』になると、離縁するまでは『我慢』なのだと傲慢に思っていて。それらすべてに正面から水を掛けられてしまった……羞恥心。

妻が自分を愛していると思っていたのか。それを失望させてしまった、喪失感。

離縁を求めようとした相手が既に居なくなっていたのだから、いっそ清々しいとそう思えばいいはずなのに。どこか後味の悪いモヤモヤとした感情。後悔とはまた違う何か。

「俺が……捨てられた……?」

そう。自分が彼女を捨てるつもりだった。だが、これでは自分が捨てられたようだ。

否、まんまと先に離縁を切り出されているのだから、確かに捨てられたのはハリードなのだろう。それは新しい恋を始めるには随分と腹立たしく。どうにも癪しやくに障る。

「旦那様、手紙は読まれましたか」

「サイード、お前、この手紙はいつ……?」

「一ヶ月ほど前でしようか。旦那様の帰還の目処が立ったと知らされた後でございます」

「……なぜ」

「はい? 何がですか」

「……なぜ、エレクトラを止めなかった?」

「止めて欲しかったのですか?」

「当たり前だろう!」

ハリードは立ち上がって侍従長を睨にらみ付ける。

「なぜ?」

だが、侍従長は平然とした顔でそう問い返してきた。

「なんだと?」

「エレクトラ様とは離縁されるおつもりだったのでしよう? だからこそ旦那様は、あのお嬢様を

連れて帰ってこられたのでは?」

「そ……! それは……」

「旦那様も離縁状を用意なさっていたのではないですか」

「ぐっ……」

ハリードは侍従長から目を逸らした。そして用意していた己の離縁状を服の上から握り締める。

「……男は、一度でも好意を寄せられた女性が永遠に自身に愛を誓うものだと思いがちです。それはまったくの幻想というのですが。旦那様とエレクトラ様には、その愛すら元からなかったではありませんか？　であれば不貞を犯された旦那様に愛想を尽かすのも当然かと思えます。旦那様は今日、エレクトラ様を捨てられるおつもりでしたか？」

「お、俺は……！　しかし、彼女の今後のことも考えて……！」

「不要でございましょう、エレクトラ様には。英雄の功績に免じて慰謝料も不要とのこと。貴方と諍いを起こす暇があれば、さっさと新しい生活を始めたいとのことでした。エレクトラ様から旦那様への未練は一欠片かけらも感じませんでしたね」

「ぐっ……！！」

今日、ハリードが使用人たちへ感じていた違和感の正体をようやく悟る。皆、怒っているのだ。

ハリードがリヴィアを選んだことに。エレクトラを捨てるつもりだったことに。

二年の間、カールソン男爵家を担っていたのはエレクトラだった。その間で使用人たちは彼女の味方となったのだろう。ハリードに対して怒りを抱く者たちしかいない屋敷で新生活が始まる。

過去に区切りをつけるどころか残された多くの者に敵意を向けられる中で。

彼らの心は己ではなく妻にあった。ハリードにはどうにもすることも出来ない。

離縁を求めた妻は……既に家に居なかったのだから。

エレクトラは最初にハリードについての一報で彼が『英雄』と評されるようになり、恋仲の女性がいるのだということを知り、即座に決断した。あの予知夢を信じることにしたのだ。

ずっと警鐘のようにあの夢の内容が忘れられなかった。夢を見ていなければ自分はロクに結婚式も挙げないまま結婚して初夜でハリードに純潔を捧げる。そうして翌日、戦地へと旅立っていった夫の無事を祈りながら帰ってくることを信じて男爵家を支えて。その挙句、帰ってきた夫に理不尽に離縁を突きつけられるのだ。……きつと、その時の自分は絶望するだろう。理解が出来ずに『なぜ？』と泣いてしまうかもしれない。或いは、あまりの屈辱に激しく怒りを抱くか。まったく許せることではない。度し難いことだと思ふ。戦場で命懸けだからこそ燃え上がったのだろうか。

しかし如何なる理由があろうとも、それは不誠実に違いない。

「……ふう」

だが、落ち着かなければ。まずハリードの不貞を示すのは戦場からの一報のみ。

確たる証拠があるワケではなく、噂うわさの類たぐいに過ぎないと言っている。だから今すぐ離縁すると屋敷を出ていくのは得策ではないだろう。それに急に主人の代行を務めていた男爵夫人が居なくなれば困るのは領民や使用人たちだ。彼らには何の罪もない。彼らを苦しめるつもりなどエレクトラにはなかった。だからエレクトラが決断したのは夫が帰ってきた時、必ず離縁を突きつけられるのだと覚悟すること。そして、それに向けて動くことだけだった。

領民と使用人たちには好かれていた方がいいだろう。

『エレクトラ夫人の治世では満足出来る暮らしだった』と思わせられれば今後、彼らを味方に出来る。ずっと先までを見据えた繋がりでなくていい。自分が居るのは一時のことだから。

そう。短期的に彼らの心が掴めればよいのだ。それならば出来る。

そうしてエレクトラは目的を定めて活動し始めた。

ハリードが出兵してから一年以上が過ぎ、彼が辺境にて『英雄』と評され、そして恋仲の女性がいると知らされてから、更に二ヶ月ほど経った。まだ彼が戻る目処は立たないようだ。

戦場からの報せは逐一もたらされるのだが、ハリードについて書かれている内容は以前見たものから大きな変化はない。

「……ねえ、サイード、それからサリア」

「は、はい。奥様……」

侍従長サイード、侍女長のサリアにエレクトラは声を掛ける。一報の内容に目を通しながらだ。

それが一体どのような内容なのかは既に二人も把握している。

主が『英雄』と持ち上げられるのはいい。だが、そのそばに『愛する者』がいるなどと。

既婚者である主に付け加えるべき内容ではない。

そして、それを妻であるエレクトラが面白く思うはずもないのは彼らも分かっていた。

「何かおかしいと思わない？」

「え？」

二人はエレクトラが夫の不貞に激怒し、自分たちを罵るのではと身構えていた。

だが彼女は激昂せず、冷静な口調で続ける。

「旦那様を持ち上げるのはいいのだけど。どうしてそこにわざわざ愛する者がいるなんて書き加えるの？ 調べれば彼が既婚者だと分かりそうなもの。まあ男爵だし、結婚式も挙げていないから知らないとも考えられるけど……」

エレクトラはだんだん違和感を覚え始めていた。どうも、この一報はハリードの不貞をどうしても肯定的に広めたい様子なのだ。何の意図があつて？ 英雄のプロパガンダだから？

相手は女僧兵、教会の治療士……治療魔法で騎士たちを治療して回る若い女性だ。

一報ではそんな彼女のこととやらたと持ち上げるように書かれている気がする。なにせ、お相手の彼女は『聖女』などと持て囃しているのだ。

今までのエレクトラは、予感めいた夢と現実の板挟みで他のことを考える余裕がなかった。

だが、あの夢を信じることに決めた今。改めて考えると、どうにもこの一報に違和感を抱く。

「これ、王都でも伝えられているのよね？」

「はい、そのはずです」

「……世間では彼らは『英雄』と『聖女』と持て囃されているということね」

つまり、ランス王国各家に報じられる一報で持ち上げたいのはハリードだけではない。

相手の女性、『リヴィア』という名の女僧兵のことも『聖女』と銘打ちたい様子だ。

これはもう何者かの意図したことではないだろうか。英雄と聖女の、戦場での恋愛譚。それを大々的に報じたいのだ。

「王家か、或いは教会の思惑？ どちらもかしら。或いはそれに近い誰かが……？」

まず『英雄』の存在によって生じるメリットを考えると戦場で戦う者たちの士気の向上だろう。国全体、国民の気持ちも『英雄の活躍に期待する』というプラスに寄るはず。

そういうメリットがあるため、王家が主導してハリードを持ち上げようとしてもおかしくはない。実際、暗い一報ばかりなんて誰も見たなくなるだろう。

それよりは英雄の活躍として報せてもらった方が受け取る側は気が楽だ。

彼がいる限り国は守られるだろうと安心することも出来る。国民の安心は治安の安定に繋がる。王家としてはやって然るべきだろう。

次いで『聖女』だが、こちらは教会が関わっているかもしれない。なにせ、リヴィアという女性は教会所属の治療士、女僧兵なのだ。そんな彼女が『聖女』と評されれば教会の利益になる。

聖女のようにと祈る者が増え、聖女がいるならと信仰心も深くなるだろう。

同じ戦場で『英雄』と『聖女』が現れて彼らが恋仲と知られれば人々の興味も増すに違いない。

……そうなると。英雄には既に妻がいるなんて彼らにとっては『邪魔』な存在ではないだろうか。もちろん英雄が妻を一途に愛しているならばそれもいいとは考えるはず。

……だが、おそらく実際、ハリードはリヴィアという女性と『そういう仲』になっているのだと思われる。エレクトラは夢で見た二人の親密な様子を思い出した。

前線での仕事を終えた英雄ならばともかく、ハリードという『英雄』にはまだ戦ってもらわなければいけない。その活躍で民の求心してもらわなければいけないのだ。

そんな彼には『不貞』の悪印象は相応しくない。だからこそ一報の中では、不自然なほどに彼が

既婚者であることが書かれない。ただ聖女との仲睦まじい姿を……と。だとしたら。

「奥様？」

「……あのね、二人とも。これから『私』に対して悪評を広める者が現れるかもしれないわ」

「えっ？」

ハリードが不貞をしているという『事実』は報じることが出来ない。彼は貶められないから。

それは同時に『聖女』であるリヴィアも貶めることになってしまう。ならば彼らの最善は？

……ハリードの妻であるエレクトラを『悪者』にしてしまうことではないだろうか。

そうすれば彼らの体面は守られる。守られてしまう。だから。

「そうなのは、この男爵領に嫌がらせをされるかもしれない。私の悪評を流すために何かしらの手を打ってくるかも」

「お、奥様？ それは一体、どういう……？」

ずっと、どうして己があのような予知夢を見たのかと置いていた。『ただの不貞』を教えてください。奇跡なんて神様は何をお考えなのかと。もし、それがただの不貞では終わらない、もっと大きな陰謀であったのなら。そのような理不尽に晒される運命を神様が哀れんでくださるのだとしたら。『ヴェント家にも伝えるわ。不埒なことを考える輩が領地に現れるかもしれない、と。警戒するように。貴方たちも気を付けてくれる？』

はたしてエレクトラの懸念は当たった。なんと、『英雄の妻』を名乗る不埒者が、カールソン領とヴェント領に現れたのだ。その者は如何にも『悪妻』だと思われるような言動を繰り返したらしい。何者かがエレクトラの評判を貶めようとする意図は明らかだった。

引退したカールソン前男爵やヴェント子爵を継いだエレクトラの兄ベルトマスとも直接会って話をする。その際、ハリードの不貞についてカールソン前男爵からエレクトラは謝られた。

「夫が戦場で戦っていることや、そこで功績を上げていることは事実です。不貞については思うところはありますが……。このカールソン領を蔑ろにする気はありません」

エレクトラがそう宣言するとカールソン前男爵は安心したように息を吐く。

彼女は改めての謝罪と感謝を受け取った。そして久しぶりに会う兄と彼女は話し合う。

ベルトマス・ヴェント子爵。エレクトラの兄。彼女と同じ水色の髪と水色の瞳をしている。

長めの髪に、騎士のハリードに比べれば華奢な体格。体力よりも知性がありそうな雰囲気。

ヴェント家の家風は文武両道であり、このような見た目であっても荒事でも頼りになる。

今もエレクトラが尊敬する兄だ。幼い頃などはエレクトラも彼と一緒に武芸を学んだ。

生憎とエレクトラには武の才はなかったもの、お陰で戦いにおける胆力などは備わった。

今、直面している窮地などに堂々としていられるのもヴェント家の教育の賜物だろう。

「エレクトラ、大丈夫か？」

「ベルトマス兄様、ええ。私は問題ないわ。でも私の偽者が現れるなんて」

「そうだな……。お前に言われて領地の巡回を増やしたが……私も思いもなかったよ」

聞けば、ヴェント領に現れたエレクトラの偽者はなんともお粗末なものだったという。

髪色だって彼女とはまったく違う黒髪で、その正体は他所の領地の娼館で働く者だった。

何者かにお金を貰ってそんなことをしたそうだ。まだ大それたことなどしていなかったので嚴重

注意をしてから領地の外へ追い出して対処したらしい。

カールソン領に現れた方の偽者は逃がしてしまったが似たような人物かもしれない。

「……私の偽者、か」

「エレクトラ？」

心配そうに見る兄ベルトマスを少しだけ忘れたようにエレクトラは思案に耽るのだった。

何者かの悪意をはつきりと感じたエレクトラだが、だからといって、その黒幕を突き止めようとはしなかった。どうにも黒幕がただの男爵夫人が桶突せきいて無事に済む相手とは思えなかったのだ。

各地にもたらされる『英雄』と『聖女』扱いの不貞男女をとにかく持ち上げたい何者か。彼らをそこまで持ち上げて、その誰かにとってどうなるのかは何も分からない。

想像を膨らませるのにも限界があった。

ただ、エレクトラは領民や実家に被害をもたらさないためにあらゆる対策を講じた。

『悪意ある何者か』は確実にいる。今この時も。それを念頭に活動していくことにする。

『私』を陥れたいのか、ヴェント子爵家を陥れたいのか」

両方かもしれない。例えば、ヴェント家を貴族から追い落とし領地を奪う。そして英雄と持て囃されているハリードに与えて領地を拡大させるのだ。二つの領地を合わせれば『伯爵』に陞爵しても釣り合うだろう。それをして誰が得をするのか、まったく分からないのが問題なのだが。

「……考えても仕方ないわね」

とにかく『敵』はいるのだと警戒する。相手が焦じれて何かを仕掛けてくる可能性もある。

思うにその何者かはハリードを陥れようとはしていない気がする。

そもそもエレクトラが嫌な予感を覚えたのは戦場から届く一報の内容ゆえだ。そこでハリードは『英雄』と称賛されている。わざわざ、そのパートナーとして『聖女』を持ち上げているが二人のことを悪く書かれてはいない。何者かはエレクトラにしか悪意は向けていないと言えるだろう。

それからは地道で地味な戦いの日々だった。男爵夫人を陥れようと企む何者かがいることを前提にエレクトラとヴェント家は警戒し続ける。

まずは、とにかく悪評を流さんとする動きへの対策だ。次にあるとすれば商売の邪魔か。

或いは農業の妨害か。それらは領民の生活に大きく影響してしまう。これまでの傾向から考えて何者かは『英雄』ハリードに害を与えようとはしていない。あくまで『英雄』と『聖女』は、何者かにとつて人々に称賛される対象にしたのだ。その誰かにとつて邪魔なのはエレクトラだけ。

だから『ハリードの領地』であるカールソン男爵領をそこまで貶める気はないとは踏んでいるが、それも確かなことは言えない。領民の生活を保障するために備蓄の確保と警備を強化した。そちらもやはり『敵』を想定しているの目に見える警備とは別に隠れた警備人員を配置し罨を張る。

「……奥様、『網』に掛かったようです。しかも捕まえました」

「え、捕まえたの？」

以前、カールソン領に現れた『偽・男爵夫人』には、まんまと逃げられた。

深追いもさせる気はなかったのだが、今回は上手く捕まえることが出来たようだ。

「備蓄食料に何かをしようとした男を捕まえております」

「……よく捕まえられたわね」

エレクトラが想定していた黒幕はかなり『上』の何者かだ。

そんな誰かの指示で動く人物が尻尾しっぽを掴ませるような真似をするとは思わなかった。

「おそらく、こちらが警戒していると思わなかったのかと」

「まあ、そうでしょうね」

エレクトラとて自分がどうしてここまで強く懸念を覚えるのか分かっていない。

もしかしたら、あの予知夢ほどではないにせよ何かしら特別な『予知』をしているのか。

「……会うことは出来る？」

「危険です、おやめください。奥様を狙っているかもしれないのですよ」

「私を狙っているのはそうでしょうけど暗殺が目的とは思えないわ。少なくとも私の評判を下げてからが望みじゃないかな？」

偽者と断じて対応したことで偽・男爵夫人による私の悪評は広まっていない。偽者が吹聴しようとした方向性としては、エレクトラが英雄ハリードに執着し彼にまわりついている、という類のものだ。それだけでなくエレクトラの性格には難があるように見せかけ、自ら白い結婚を求めて、侍従たちを懐柔して浮気をした挙句に夫が英雄となったと知った途端、彼に執着し始めた、などと。とにかくエレクトラの印象を悪くしようとしていた。

白い結婚であることなど絶妙に真実を織り交ぜているのが腹立たしいとエレクトラは思う。

そういうった妻の悪評を広めた上で英雄を凱旋がいせんさせたいのだろう。

ハリードが聖女と結ばれる美談を際立たせるために。

侍従長たちとの会話を終え、改めて準備をしてからエレクトラは備蓄食料に工作をしようとして

いた男の下へ向かった。男の目的がエレクトラを陥れることと分かっているため警戒は強くする。今の領地には腕の立つ衛兵が少ない。そもそも実力者であれば辺境の戦場に駆り出されているのがランス王国の現状だ。そのため、エレクトラの行動はとても危険な行為だった。

「はじめまして、人殺し」

「……！」

エレクトラは開口一番で男にそう告げた。

「お前が手を付けようとしたのは領民たちが食い繋ぐための最後の砦とりで。それが食えなくなれば死者すら出ただろう。……お前は神の意に反する人殺しだ」

エレクトラはカマをかけた。男がどういった方面から来た者なのかを探る気だったのだ。

だから、まず男が教会関係の人間なのかをはっきりさせようとする。

「どうして領民を大量に殺そうとした？ お前の名は知らないが教会には破門をさせるように願おう。お前が何者かは知らせずにな」

「ち、違う……」

男はそれまで押し黙っていたが、私の言葉に初めて口を開いた。

その表情の変化から男の立ち位置になんとなく当たりを付ける。

「……教会の指示、か」

「……！」

あえて断定口調で何もかも分かっているようにエレクトラは呟つぶやいた。男に問いかけるのではなく、一連の流れで察したと錯覚させる。エレクトラは頭が痛くなった。

自分は本当に目の前にある情報から論理的に推察したのだろうか？

それとも、やはり予知夢のように超常的な力で事態を察したのか？ ……何も分からない。

ただ男の様子を見てエレクトラは次の行動を決めた。

「彼を解放していいわ」

「え、よろしいのですか!？」

「ええ、領民の食料を奪おうとして彼の心がそれで良いと。神に許されると。そう考えているのならもう救いはありません。きっと私たちが手を下さずとも神の裁きがあるはずです」

あとは男の良心に委ねるだけだ。それよりも、と。エレクトラは次の行動に移る。

「……教会に行くわ」

己の名を偽り、教会に通おう。『夫の不貞に苦しめられている』と嘆いて救いを求めるのがいいか。『エレクトラ』でなければ救ってもらえるはずだと思った。

ハリードが帰ってくる前にただの平民として教会に入るのもいい。

いわゆる修道院入りに近いものだ。教会に一時的な保護を求める。

「……そうね。それがいいかもしれない」

『聖女』リヴィアの持ち上げがあるため、おそらく『敵』は教会の上層部などにいると思うのだが、なんとなく、それだけではない予感も強かった。

『男爵夫人エレクトラ』の失踪とタイミングをズラせば、いわゆる『灯台の下が一番暗い』という諺ことわざに似たことになる気がする。それなら上手く『何者か』から姿を隠せるだろう。

……そうして。

エレクトラは表向きの『男爵夫人が姿を消した』タイミンクを侍従長たちの協力の下で遅らせて。自身は平民の『エレン』を名乗り、教会に保護を求めたのだった。



辺境でハリードと出会って恋仲となり、『聖女』と評されるようになった少女、リヴィア。

幼い頃に教会に預けられた彼女は、ファーマソン公爵と平民の間に生まれた子供だった。

リヴィアの母は美しい人で、公爵は妻に隠れて彼女を抱き、子供を産ませたのだ。

生憎とリヴィアの母は産後の肥立ちが悪く、リヴィアを産んですぐに亡くなってしまった。

ファーマソン公爵は庶子のリヴィアを引き取ることも出来ず、教会に預けるしかなかった。

そして公爵はずっと隠れてリヴィアの面倒を見てきた。公爵夫人である妻の目もあり、表立った援助は出来なかったが……。そんなリヴィアは教会で育ち、治療魔法を覚えて治療士として働くようになった。ファーマソン公爵は、いつか娘としてリヴィアを引き取りたいと願いつつもその願いが叶うことはないとも諦めていた。だが、リヴィアが戦場の後衛部隊に参加し、負傷者の治療を担うと知った。『そんな危ない場所に』と憤り、公爵は詳しくリヴィアの状況を調べさせる。

すると彼女が一人の騎士に恋心を抱いていることを知った。相手はただの男爵だ。

だが、騎士としての腕は見込みがあった。ファーマソン公爵は今までリヴィアを公爵令嬢として養うことが出来なかったことに罪悪感を覚えていた。

——だから。娘の恋路と。その立場を今こそ引き上げてやるために。公爵は動くことにした。

まず娘が恋した相手である男を調べ上げた。相手の名はハリード・カールソン。ただの男爵。公爵はハリードに特別な剣を与えた。魔法の力が込められた、魔獣に有効な攻撃を与えられる『魔剣』だ。公爵家の財力でなければ手に入れることは出来ないほどの高価な剣。

間違ってもただの男爵に過ぎないハリードが手に入れることは出来なかつたはずの剣だつた。そして二人の評判を出来るだけ引き上げ、功績と共にハリードの陞爵をさせるように動いた。当然リヴィアのこと『聖女』と持て囁す。多くの民がリヴィアのことを聖女として認めれば、いつか娘として迎えることも出来るかもしれない。そういつたことを考えて動いた。

更に教会の一部とも結託する。公爵の意向に従う者を始め、今まで賄賂などのやり取りをし、互いに優遇措置を取ってきた者たち。『聖女』の出現によって利益があると判断した者たちだ。彼らの協力の下、リヴィアを『聖女』として、よりいっそう盛り立てることが出来た。後の問題はハリードの妻だけだつた。

調べた結果、二人は結婚式さえも挙げておらず、更に白い結婚だと知られている。ハリードとその妻がどのような仲かは分からないが、その妻がリヴィアの幸せの邪魔者であるのは変わりない。

ファーマソン公爵は教会の協力を得てハリードの妻、エレクトラの評判を落とそうとした。公爵にとって男爵夫人で元・子爵令嬢など気に掛ける必要を感じない相手だ。

だが、その思惑は中々上手くはいかなかつた。いくつかの案は対処されてしまい不発に終わった。彼女の実家であるヴェント家もそうだ。公爵が用意した工作員に対応し、エレクトラの悪評を抑え込んだ。裏工作をそこまで苛烈にするにはリスクが高い。娘が嫁ぐ家そのものを陥れることは出来ず、その妻の評判だけを貶めたかつた故に事が小さくなり、すべて対応されてしまった。

公爵としては業腹だったが……。肝心のハリードはリヴィアに惚れ込んでいる様子だという。ハリードの妻の評価が落ちずとも離縁し、リヴィアを望むのは確実だと聞いた。

「ハ……。一端の貴族だったということか」

様々な工作を乗り切った男爵夫人に苛立ちを感じながら、それでも娘に女として負けて、惨めに離縁されるのだと思えば公爵の苛立ちも収まるのだった。



エレクトラたちが結婚してから二年ほど。ハリードが辺境から領地へ帰還する一ヶ月ほど前に、エレクトラはカールソン家の屋敷を出ていたようだ。

ハリードはエレクトラと離縁するつもりだった。だから既に自身の名が書かれた離縁状を用意してから帰ってきたのだ。この離縁状にエレクトラが名を書けば、それで終わり。そう思っていた。

だが、ハリードが家に帰った時に妻は既に家に居なかった。それどころかそこにはエレクトラの名が書かれた、彼女の用意した離縁状があった。ハリードの不貞に怒りを感じ、別れを告げる手紙と共に。己が妻を捨てるつもりが先に妻に捨てられていた、と強く主張するように。

「旦那様、こちらの離縁状にサインをなさってください」

侍従長サイードに促され、差し出されたのは自分が用意した離縁状ではなく、エレクトラが彼女のサインをしたものだ。

ハリードが用意していた離縁状は彼の服の中に入ったままなのだから当然と言える。

「……書かないのですか？」

「本人が居ないのに書くものではないだろう！ そのサインも偽物かもしれない！」

「ご本人様のサインですよ。我々使用人の目の前で記入されました。この屋敷で働く我ら全員をお疑いですか？ 旦那様」

「……なんだと!？」

ハリードはよりいっそう苛立ちを覚えた。なぜ、自分が主張することを事前に予期していたように対策しているのか。

「お前、誰が主人か分かっているのか？ お前を雇っているのは俺だぞ！」

「……それはつまり何をおっしゃりたいのですか？」

「俺の望むように動くべきだということだ！」

「……旦那様の望むように、ですか」

「そうだ！」

「……であればやはり離縁状を書いていただき、責任をもって役所へ提出に向かうのが、旦那様のご意向かと思えますが」

「なっ、そのどこが……!？」

「応接室で今も待たれている女性。彼女と結ばれたいのではないのですか？」

「そ、それは……!？」

その通りだった。ハリードは今日、エレクトラと離縁し、リヴィアと結ばれるつもりだったのだ。ただ離縁はハリードから言い出すはずで、エレクトラはそれを聞いて泣き絶えるはずで。

間違つてもこのような愚弄される形で、己が捨てられるような形での離縁ではなかつた。

「旦那様は、どうされたいですか？　あちらのご令嬢、リヴィア様と申されましたか。彼女も旦那様と結ばれるおつもりだったのなら、こちらの離縁状を速やかに記入し提出するのが『彼女への』誠実な対応だと思えます。それとも、あの女性は愛人にでもされるつもりで、エレクトラ様への顔見せがしたかつたのですか？」

「ち、違う……」

そうだ。この離縁状を書いてすぐに出す。それで終わりだ。元からそうするつもりだったのだ。ただ何か納得が出来ない。苛立ちを覚える。このままでは腹が立つ、と。それだけ……。

「旦那様、罪の意識があるのですか？」

「……罪、だと？」

「不貞は罪と言えるでしょう」

「そんなこと！　俺は確かにリヴィアを愛して……！」

「愛は免罪符にならないと思えます。そのような考えでエレクトラ様と離縁をなさつたと他の貴族の方々の前でも堂々とおっしゃるのですか？　私は旦那様の方が失望されると思います」

「ぐ……！」

その後も侍従長とハリードのやり取りは続いた。だが話せば話すほどハリードは格好がつかず、無様を晒すだけだつた。その様子を見ている使用人たちからの評価もどんどん下がっていく。

「旦那様の今の態度をあちらのご令嬢に真摯にお伝えした方がよろしいでしょうか。こうも離縁を悩むのですから、きっとそれが彼女のためでもありませんよ」

「やめろ！……くそ！書けばいいんだろう！」

まったく思った形ではないが、ハリードはエレクトラが用意した離縁状にサインをする羽目になってしまった。サインを確認した侍従長サイドは記入された離縁状を受け取る。

「ご自分で役所に提出されに行きますか？ 私には奥様の代理人として委任状がありますので提出が可能ですが」

「……なぜ、そんなものまで受け取っているんだ」

「エレクトラ様ご準備されていたことですから」

何もかも見透かされたような用意周到さにハリードは嫌な気分になるばかりだった。

そしてエレクトラと離縁し、改めてリヴィアと婚約することになったハリード。

「ハリード様」

「あ、ああ、リヴィア。いや、気にしないでくれ。エレクトラとは無事に離縁出来そうさ。君にも迷惑を掛けずに済みそうだよ」

「……奥様とは会えないのですか？」

「ああ、彼女は既に一ヶ月前に家を出たらしい」

「……そう。私、奥様に謝りたかったのに。今どこにいらっしゃるの？」

「どこ？ いや、それは……。サイド？ エレクトラは今どこにいるんだ」

「存じ上げません。奥様は行き先をあえて我々に伝えずに屋敷を去りましたから」

「……無責任だな！」

思わずそう不満を漏らしてしまうが、ハリードが喋る度にそれを聞く使用人たちの温度が更に冷え込んでいった。

「ねえ、でも心配でしょう？ 捜してあげるべきじゃないかしら、ハリード様」

「そう、だな。心配だから……。サイド、エレクトラを捜してくれ。離縁するのは仕方ないが俺たちは夫婦だったんだ。最後に話もせずになんておかしいだろう」

「……かしこまりました、旦那様」

侍従長にエレクトラの搜索を委ねるハリード。その後は気を取り直すようにリヴィアと過ごした。そんな彼らを見る使用人たちは深い失望を抱くしかなかった。

「……侍従長」

「ああ、そうだな。所詮、不倫をする者の考えなどおかしくて当然なのだろう」

「エレクトラ様が事前に皆の分の紹介状を用意していなかったらと思うと恐ろしいです」

「……そうだな」

侍従長サイドは思う。あの様子では気に入らない使用人に解雇を突きつけるのは時間の問題だろう、と。しかし二年間、この屋敷で過ごしていた者たちは既に全員がエレクトラの用意した紹介状を持っている。再就職先に困ることはないだろう。彼女はいつでも使用人たちが逃げられるようにしていたのだ。随分と前からこのようなことになるのが分かっていたかのように。

「あのリヴィアという女性。わざわざエレクトラ様を捜し出そうとするなんて嫌な予感がするのですけど」

「……そう、だな。俺も何か嫌な感じだと思ったよ。侍女長から見てもそうなのか？」

「はい」

「どういう意図だと思おう？」

「……深い企みがあるかは分かりません。ただ少なくともあの方は、エレクトラ様に対して勝ち誇りたかったのではないでしょうか？」

「勝ち誇る？」

「ええ、その。女性として選ばれた、愛された、ということです。何か大きな企みがあるというよりはどこか浅はかな印象を受けました」

「……そうか。ならエレクトラ様には会わせたくないな」

「はい、そうですね」

「今すぐ逃げることも出来ない。旦那様がきちんと領民のことを考えているのなら……如何に思うところがあつたとしても我らはお仕えしよう」

「……はい。領民たちの幸せはエレクトラ様が願われたことですから」

こうして、エレクトラとハリードは離縁に至つたのだつた。